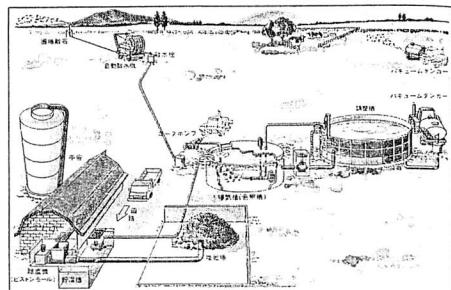


開発局と業者

旧態依然の発想で 肥培かんがい事業

ルポライター
滝川康治



人利用の場合のスラリィゲーションシステム
（把塙かんがい事業の概要図）

大がかりな装置を必要とする肥培か
んがいは、本道では未完成の技術とい
える。「クリーンな醸造」の美辞麗句の
もとに、農民を踏み台にしてきた事業
ではないか——というのが、話を聞い
たわたしの疑惑である。

宗谷丘陵に抱かれた稚内市沼川地区では、約100戸の酪農家を対象に国

大方の畠辰家が子供達に説書に半を担当しており、新潟川地区国営かんがい排水事業期成会（内谷静雄会長）と沿沢農協、市の3者で開発局などに「早期着工」の陳情などを行なつてきた。

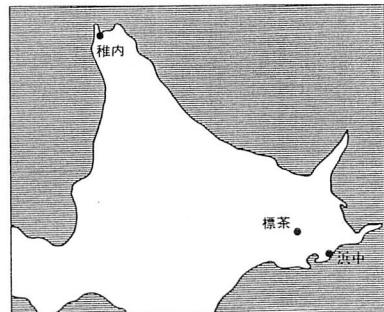
同農協の濱本和雄組合長は、

「糞尿施設の整備にはかなりの投資が必要だが、国営事業だと95%の補助率（圃場配管などを除く）で農家負担が少なくてすむ。3～4年に1回、夏場に干ばつがあるので、温潤かんがいを含めて事業化したい」と、この事業に期待を寄せる。市経済部の石川哲也農政課長も、「市民の飲料水を賄っている

谷川（声問川の支流）上流部に建設する、総貯水量360万m³のダムからバ音流ラインで水を引き、肥培がんがいと、干ばつ時に水を散布する湿润かんがいを実施するとの計画で、本年度から実施設計に入った。着手予定は98年度、「完成までには15年くらいはかかるだろう」（稚内開発建設部）。現時点では300億円の総事業費を見込む。宗谷管内には、猿払村と枝幸、歌登町でも同様のダム建設計画がある。

「 のため?」

環境や漁業をむしばむ大規模酪農の糞尿問題。解決の処方箋として開発局が道内各地で手がける大がかりな「肥培かんがい事業」は、果して救世主となるのか——。稚内市と浜中町の事例を追いながら、旧態依然の発想で進むこの事業の矛盾を検証する。



「一期的な糞尿対策」のはずか

「スラリイゲーション」という耳慣れ
ない造語がある。液状糞尿(スラリー)

ほど前から肥培かんがいを実施中で、
20戸ほどが“試験台”になつてきた。

森の木を伐り、川のそばまで草地化したうえに、やみくもな規模拡大を始めた結果、酪農の糞尿問題が表面化している。堆肥として熟成させて畑に還元する農業本来の姿が見失われ、ゴミ扱いされた糞尿が河川に流れ込む事態が発生。漁業団体がパトロールに乗り出し始めた地域もある。「酪農が抱える最大の環境問題は糞尿対策」と誰もが言う。

とかんがい（イリギーチョン）を組み合わせた、図のよきシステムだ。道内では70年代から試みられ、事業主体の北海道開発局は「肥培かんがい」と呼び、道北や道東の酪農地帯に計画がある。93年までに6地区40戸が個別または共同方式で実施し、開発局は事業枠の拡大を目指す。化学肥料の節減や牛舎周辺の環境整備、牧草の増収

訪問先の中堅酪農家は「開発局の上
人は「施設を増やす」と言うけど、
現場の担当官は『これ以上やりたくない
い。従来の施設を完全なものにして終
わりたい』と漏らしている。開発局
業者、そして我々にとつても初めての
経験で、思うように進まなかつたのは
事実。人には勧められない施設だと申
うね」と言いながら、導入後の苦労詳



国営農業開発事
業の一環で10年

訪問元の中堅酪農家は「開発局のひとは『施設を増やす』と言うけど、現場の担当官は『これ以上やりたくない』。従来の施設を完全なものにして終わりたい」と漏らしている。開発局業者、そして我々にとつても初めてひどい経験で、思うように進まなかつたのは事実。人には勧められない施設だと虫うね」と言いながら、導入後の苦労詳説を教えてくれた。

バーンクリーナーと呼ばれる糞尿離出装置の先に、スラリーと固形物を分ける分離機を設置してあるが、これだけで何台も更新した。スラリーを薄めるとタンクをトタン張りのハウスで覆っているが、発生するガスの影響でわざか数年で屋根が錆びた。散水機が目撃もありしたこともある。試行錯誤を繰り返して、修理をしながら使う……。東業に乗つた農家は、いざこも同じよくな悩みを抱えてきた、という。

牧草の収量が増え、購入肥料代は減つて、確かに肥培効果はある。「始めた以上、いい草づくりをしたい」と、この人は努力を重ねていた。事業費は約

あり、自然環境を汚してはしくない開発局の案内で視察にも行つたが、分なものとは思わない。ダム建設反対の線は崩しておらず、今後の対応いんではムシロ旗を立てることもある。声問漁協の葛西忠組会長は、こうつて語氣を強める。組員97人、カイヤツブ、コンブ、毛ガニなどの沿漁業で生計を立ててきたが、河口部ある漁港に砂が堆積して出入港に支をきたしている。という。70年代か急速に進んだ声問川の切り換え工事水位の低下が進んだためだ。事業者との間で開発行為に対する事前協議制度の間で開発行為に対する事前協議制度

安い水道料金を設定できる。肥培か
がいによるシステム化で牧草の収量
上げられる。償還金や電気・水道料
などで年間200万円程度の農家負
担と試算している」と樂観的に語り、「
助率の高い事業に乗せよう」と躍起だ。
が、こうした開発局に対する依存
勢とは裏腹に、事業化を疑問視する
が少なくない。

採用しており、酪農系排水の河川流入にも神経をとがらせてきた。

「子どものころから声問川を見てきたが、昔は上流まで水が透き通つていてイトウの宝庫だった。河川の環境が変化したら海の魚にも影響を与えることを考えてほしい。取水による水量減が開発局の示した数字で収まるのか、地下水浸透したスラリーの一部が川に流入しないのか——などの疑問もある。計画段階で我々の意見を聞いてもらわなければ困る」(葛西組合員)

承諾書に判を押した人のなかにも慎重論がある。40代のある酪農家は、「原始的な環境が残されたところに、農家のためだけにダムを造るのはどうか。木を伐り、沢を埋めて、水が枯れて声問川の水量はすごく減った。子どもを育てたり、町の人を呼ぶのでも、こんな環境ではいけないとと思う。ダムを造る前に、河川敷地を守って木を植えるようなことを考えるべきだ」

長期的な環境の変化などについて時間をかけて議論するよう強調する、この人は「着工同意の判はつかない」ときっぱり言い切った。

「押しつけではなく応援を」
青年層から懸念の声も

「農家は手放しで（事業を）喜んでおらず、費用負担を心配している。肥培かんがいに掛かる費用を吸収できる経営の展望がないからだよ。かと言つて、糞尿公害は放つておけないし……」

期成会のある幹部が、複雑な胸の内を語る。「補助金にしばられる肥培かんがいじゃなく、農家が自由にやれるシステムに国が支援してくれる方がいいんだが……」とも漏らす。

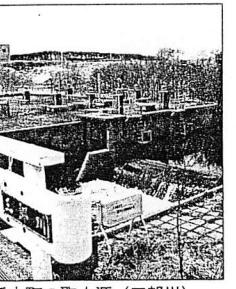
「期成会をつくつてリーダーが陳情する時代は終わつた。15年先の事業を孫のいる年配者が進めるのはどうか。説明不足だし、第一線の農家の声を聞いていない。リールマシン（自走式散水機）を使ってまでやりたい人は半数もないんじゃないか」と指摘するのは、いないんじゃないか」と指摘するのは、

「ないんじやないか」とも漏らす。

浜中町：上水源の確保が本音。 本末転倒の莫大な投資



声問川河口近くの漁港
(稚内)



浜中町の取水源（三郎川）

沼川農協の高橋茂樹青年部長だ。

昨年、部長に就任して自動的に期成

会役員になつた。部員からは、「このまま放つておいていいのか?」という声

が出てきた。近く部員を対象にアンケート調査を行ない、その結果をもとに開発局や市に意見をぶつける、という。

農協側には、具体的な数字を示して、開発局や市に意見をぶつける、という。期成会を開くよう求めている。

「推進」の表看板とは対照的に、若手農家には事業に対する冷やかな視線を注ぐ人が多いようである。

農家には事業に対する冷やかな視線を注ぐ人が多いようである。

「農家には事業に対する冷やかな視線を注ぐ人が多いようである。

農家には事業に対する冷やかな視線を注ぐ人が多いようである。

農家には事業に対する冷やかな視線を注ぐ人が多いようである。